



# 花の下の

沖津正己  
(熊本県石油商業組合委員)

「日本人の愛想よさと、節度の結びつきは、驚くべきものだ。」

ソ連作家同盟のニコライ・ミハイロフ氏が書いている。「それは股慟(いんぎん)さのもつ、もともと高尚な形式である。ゆっくりとしたお辞儀、沈黙の微笑、注意ぶかい眼眸、ヨーロッパ人に対する妥協としての握手……ほれこむ気で、のりこんできているのだから、賞め方も徹底しているのだろう。」

やさしさと控え目で、魅力のある日本娘については、オレシ・ゴンチャール氏の文章が熱情的だ。

「若い娘・エレベーター・ガールが隅っこに身をちぢめ、そこで声にかぎりのない愛情をこめ、半ば囁き声で心をこめて、何か言っている。まるで、じぶんの一ばんやさしい感情で、恋人に打ちあけ話でもしているようだ。」

この世に類まれな、甘美のコトバ、その意味するところは何か、と通訳にきいたら、

「彼女は小さいマイクロフォンに、ただこう説明しているだけなのである。」

——三階です。どうぞお降り下さいませ……四階です。お降り下さいませ。お願い申し上げます……」

もちろん彼らも日本で「冷たい目つき」を意識しなかったのではない。しかし「冷たい目つきは思い出すのが不愉快だから、それにはふれたくない。」とジナイター・マセンコさんが言った。

エッフェル塔より高い東京タワー、素晴らしい性能のマイクロ・テレビ、十三種のビタミンが、うまく配合されている、見事な包装のビタミン剤。この技術革新の日本に、低俗なものがないではない。西洋に対しての、あわれな追従としか思えぬ、愚劣さである。

「本当の高潔な日本を、私は九州熊本で見た。」と、ミハイロフ氏が書いているのだから、「ソレ、ホントですか」と私があわてるのも、無理はない。

「尊敬するミハイロフさん!

あなたはまだ私を、日本の女のウエノ・ユウコをおぼえて下さいませ。阿蘇の上で、ソヴェートの作家の方がたと御一しよに、とても愉快な一日を送ったときから、もう三ヶ月が過ぎました。今日は熊本では雷がなつて、雨が降っています。強い雨で庭のわたしの白いユリは、折れてしまいました。

阿蘇では、きつと草原が静かに顔を曇らせていることでしょう。緑色の草原の上には噴火山の煙がたちのぼり雲のように動き去ってゆきます。……」

そうだ。彼女の手紙全体が、立派な詩である。ミハイロフ氏は考える。日本人には、人間と自然とのしみじみとした融合があり、また自然にたいする愛と感謝がある。日本の詩人には、読者が作者と同じ詩的な高さにあることについての、信頼感がある。もしそうでなければ、芭蕉の次のような詩が生れるはずがない。とミハイロフ氏は力説する。

やっとたどりつく  
疲れて、宿に

するとたちまち——藤の花!

(原句「くたびれて宿かる比や藤の花」)

ミハイロフ氏に「阿蘇の娘の思い出」があるなら、私に「モスクワの娘の思い出」があつて悪くない。

モスクワの娘のほとり、滅法可愛らしい娘さんだった。私と一しよに散歩していた、北の富士閣が「この娘さんに写真にはいるよう、頼んで下さい。」と言う。娘さんに話すと「いやです」と、答えはイトも、かんたんだ。

閑取たち、男前だけれど、何しろ大きく、恰好が異様だ。私はホテルのロビーで、魔法使いの婆さんのような女性に「この人たち、みんな男であるか?」と小さな声で聞かれたことがある。「我が国の、訪ソ相撲団の全員は男性でアル。例外なしに。」と私が、やや、おごそかに答えてやったら、彼女安心して、感心していた。

「九州の熊本は、ロシア文化にたいする愛情で、ほくたちを迎えてくれた。阿蘇火山にいったとき、途中でほくは、本当の高潔な日本を見た。壮大さが、ますます高まっていった。はじめは山すその方の薄紫の藤の房、エメラルド色の野原、それから山にさしかかると、高庄の水力発電所、桃は満開である。それから更に登ると、みずみずしい草原があり、世界一の大噴火口の開墾され、人の住んでいる盆地がある。ここに町が三つと村が十一ある。」

最頂上部になると、険しい岩壁と五つほどの、比較的小さな噴火口の頂きがあり、噴煙が渦まいている、その噴火口へ、われわれは、深い谷間の上をロープで動いているゴンドラに乗っていった。ゴンドラの車掌をしている女の子が、ほんの数秒遅れたのたいして、「長いことお待ちせし、大変失礼いたしました。」と言った。

噴火山へ案内してくれたガイドの娘さんは、バス会社に勤めていて、現代的なきちんとした薄緑色の洋服をきて、白い手袋をはめ、白い靴をはいている。黒い捲毛は流行風に片側に束ね、首には細い鎖のペンダントをかけた、細い、小さな顔の、小柄な、よく気のつく、はずかしがりやの……といった調子で、ガイド嬢の描写は続く。

流石は詩人ニコライ、ニコラーエヴィチ、火口もよく観察しただろうが、ガイド嬢の方も、アナのあくほど見つけたのだろう。

娘さんの名を、ウエノ・ユウコと聞いて「詩と真実」という雑誌のグループの一員だったとわかった。

火口からの帰り道、ミハイロフ氏はその娘さんに「詩を書いて送って下さい」と頼んだ。三ヶ月後、ユウコさんの手紙はモスクワに届いた。約束は必ず守る。名もかなし、草千里カ浜の乙女。雄大な阿蘇の景観は、もちろん忘れ難いけれど、一人の娘の友情こそは感動的だ。ミハイロフ氏は、そのことをモスクワの雑誌に書いた。

写真を撮ることを承知して貰う方法はある。私は熊本から持って行った家族の写真を、ポケットからとり出し「私のこの娘に、あなたの写真を、モスクワ旅行の記念として、贈りたいのだが……」と頼んだ。

「私と同じ位かしら。学校は何年?」などとたずねたりして、ニコニコ顔で北の富士閣とならんだ。「私は手紙を書きませぬけれど写真は必ず送って下さい」とモスクワ嬢は、はっきり言う。

約束に従って、私は帰国後、彼女に写真を送り、彼女は手紙を書かない。「旅には家族の写真を」と私は別のところで書いた。「守れぬ約束は、絶対にするな」と子供たちに言うとき、私はモスクワの娘さんを思い出す。われら隣人。旅する身にも、迎える身にも、望ましいのは、大げさな観光、歓迎スタイルではなく、よりよき市民意識であろう。

ミハイロフ氏は「詩人一茶」を「今日的に」紹介する。われらのあいだに他人はいない!

われらは皆おたがい兄弟だ  
咲いた桜の下では。

(原句「花の下あかの他人はなかりけり」)

## 九州横断道路

福原健司 (国鉄西部支社)

「この日カメラのファインダーを通して見たあの青い大草原が吹く風にいっせいになびく様は大洋の怒濤に似て、私の生涯忘れぬ風景の一つとして、強く印象づけられました。阿蘇、九重の横断道路はさすが南のくにだけに、おそれる。おそれるかと言ふよりも安心感といひましよう。それは一度地上を走って見ればよくわかる。」

地元で「山なみハイウエー」と命名したそうだがそんな登山道路……いや山岳地帯のハイウエーは日本の他所にはありません。 (九州の観光だより)より

旅情